

# 四国遍路と白山信仰

## —「菅生寺」の分析を中心として—

村上 由実子（愛媛大学大学院聴講生）

**The Shikoku Pilgrimage and Hakusan Worship**  
**—An Analysis of Sugōji Temple**  
**Yumiko MURAKAMI**  
**Auditor, Ehime University Graduate School**

By examining documents about the Shikoku pilgrimage from the Edo period, it is clear that there were a number of temples that enshrined Hakusan Gongen, the goddess of the sacred mountains of the Hokuriku region. Recent research suggests that in order to understand the formation process of the Shikoku pilgrimage, it is necessary to analyze the Kumano faith, the Hakusan faith, the Pure Land faith, and other faiths that existed before the popularity of the faith in Kōbō Daishi. In this paper, I will clarify the entities that brought the Hakusan faith to Shikoku, and discuss the meaning of the enshrinement of Hakusan Gongen at Shikoku pilgrimage sites.

The picture scroll "*Ippen Hijiri-e*", made in the first year of the Shōan Era (1299), states that the temple Sugōji was a sacred place where Kannon (Goddess of Mercy) appeared and that Hakusan Daimyōjin was its guardian deity. And that during the Middle Ages, Daihōji, the 44th temple, and Iwayaji, the 45th temple, were one and the same Sugōji Temple.

The statues of Sanjūbanjin, the thirty guardian deities worshipped by the Tendai sect (believed to have been made in the Kamakura period), still exist at Daihōji. Daihōji and Iwayaji enshrined Hakusan Gongen and also Sekizan Gongen, which are the guardian deities of the Sanmon sect of the Tendai sect, namely Enryakuji on Mt. Hiei. From these facts, the author believes that Sugōji was a temple influenced by the Tendai sect in the Kamakura period, and that the Hakusan Gongen of Sugōji may have been brought by the Sanmon sect.

In addition, it has become clear that the Shikoku pilgrimage sites where the medieval origin tales mention Hakusan Gongen are all sacred sites where Kannon or her manifestation, Hakusan Gongen, is said to appear, with the exception of Ishiteji, the 51st temple. It is possible that these temples were influenced by the Tendai sect and the Sannō faith.

Until now, the prevailing theory has been that the Fudaraku(Potalaka) faith, which is associated with ascetic training to remote places, played a major role in the establishment of the Shikoku pilgrimage, and that this was due to the influence of the Kumano faith. However, the author believes that it is necessary to consider the influence of the Hakusan faith on the worship of the Fudaraku faith in Shikoku. This is because, as shown in this paper, it is thought to contain elements found in the Hakusan faith, in which people go to the sacred land where Kannon or Hakusan Gongen appears (i.e., Fudaraku Pure Land) and make kechien(connections) with the deities and Buddha.

### はじめに

一般的に、四国遍路と言えば、弘法大師の遺蹟を訪ねるものとされているが、江戸時代の遍路記<sup>1</sup>を見ると、弘法大師信仰だけでなく、白山信仰<sup>2</sup>、真言密教、熊野信仰、浄土信仰、吉野修験など多様な信仰の影響を受けてきたことがうかがえる。大師信仰流行以前の基層となる信仰の分析は、四国遍路の成立を探る上でも重要であることが最近の研究で指摘されている<sup>3</sup>。

第45番札所の岩屋寺が、鎌倉時代の絵巻『一遍聖絵』（正安元年(1299)制作)<sup>4</sup>の巻二に描かれていること

は、つとに知られている。一遍は文永10年(1273)7月に「菅生の岩屋」へ参籠したが、絵に添えて詞書に「このところは観音影現の霊地」とあり、安芸国の狩人がこの山で観音を発見し「菅生寺」<sup>5</sup>を建てたこと、鎮守として白山大明神が祀られたことなどが述べられている。また、第51番石手寺に伝わる由緒を記した刻板文書(永禄10年(1567))<sup>6</sup>の冒頭には、和銅5年(712)に白山権現社が勧請されたことが記されている。さらに、江戸時代の遍路記には、白山権現を祀る札所をいくつも見つけることができる。

なぜ、四国遍路の札所寺院に、白山権現が祀られているのだろうか。なぜ、北陸の霊山である白山が、四国において信仰されているのだろうか。

この問題について、川岡勉は石手寺の由緒について「北陸の白山信仰をルーツとしていることが注意される」とし、石手寺の白山信仰は北陸の白山から伝来したとした<sup>7</sup>。平泉隆房は白山神社と日吉神社を地形図上に落とし込み、その分布から、古代の山岳信仰が修験者の行場を生み、そこに山門勢力(比叡山延暦寺)が入り、日吉信仰・白山信仰と結びつく、と論じた<sup>8</sup>。また大本敬久は東予、中予に点在する白山神社が、白王神社が多く分布する南予にはほとんど見られず、双方の多くが菊理姫命を祭神とすることから、白王信仰は白山信仰が南予地方で変容した形態であると論じた。加えて、同じく菊理姫命を祭神とする客神社が愛媛県内に数多く分布することを指摘し、比叡山の護法神である日吉山王大社の上七社の一つ「客人(まろうど)社」との関係を考える必要があり、伊予国内に白山信仰が熊野信仰とともに伝播していく主体として、天台系の寺院や修験の存在が想定できる、とした<sup>9</sup>。

いずれも四国における白山信仰を考える上で重要な指摘であるが、川岡氏の論文は石手寺が多様な信仰を持ちつつも熊野信仰に圧倒されていくプロセスを明らかにすることを目的としており、白山信仰の伝来の詳細については論じていない。また大本氏の論は明石寺の鎮守である白王権現が主題であるため、白山権現を鎮守とするそれぞれの寺院に関する分析には及んでいない。平泉氏は『一遍聖絵』に記された白山信仰に触れ、遊行寺には白山垂迹曼荼羅が伝わっているとしながらも、遊行上人や時宗と白山信仰との関係ははっきりしないと述べる。

本稿では、中世より白山信仰の存在が確認できる「菅生寺」(=大宝寺・岩屋寺)を分析対象として、白山信仰がいかにしてもたらされたかを考察する。あわせて、四国遍路の札所に白山権現が祀られる意味を、四国遍路の成立過程を考える上で重要な「補陀落信仰」から考えることとしたい。

## 1. 「菅生寺」と白山信仰

この章では、「菅生寺」に関する史料を分析していくことにより、白山信仰をこの地に伝えた主体について論じる。まず、中世の「菅生寺」の場面がある『一遍聖絵』巻二の詞書について検討する。

【史料1】『一遍聖絵』巻二「菅生の岩屋」(抄)(正安元年(1299)制作)※読点は筆者による

一遍聖絵第二／文永十年(割注)「癸／酉」七月に豫洲浮穴郡に／菅生の岩屋というところに参籠し／給、このところは観音影現の霊地、仙人／練行の古跡なり、昔仏法はまだひろまら／さりしころ、安藝國の住人狩猟のために／この山にきたりて、し□□にのほりて／かせきをまつに、(中略)この木よもす／から光をはなつ、(中略)観音なりといふ事をし／りぬ、帰依の心たちまちにおこりて、(中略)草舎をつくりて／安置したてまつりぬ、その、ち両三年を／へたて、またこの地に□て、(中略)かさねて精舎をかまへ、莊嚴／をいたして菅生寺と号□、帰依のこゝろ／さしをふかくす、われこの處の守護神と／なるへしとちかひて、野口の明神といは、／れて、いま現在せり、かくて星□□□うつ／りてのち、用明天皇の御宇、震□□朝使き／たりて、隋文帝のきさき懐胎のあひた霊／瑞ありとて、三種宝物(割注)「戒定恵宮／鐘 錫杖」をこの観音に／たてまつれり、彼朝使、すなはち此處にと、／まりて、又鎮守とならむとて、白山大明神と／あらはれ、堂の南にいは、れ給へ(中略)又、土佐／國の女人なり、観音の効験□□□□□の巖窟／にこもり、五障の女身を厭離□□□□典を誦誦／しけるか、法華三昧成就して、飛□□□□依身を／えたり、或時は、普賢文殊来現し、□□□地蔵弥／勒影護し給しによりて、彼影現尊にしたかひて／をのをの其所の名をあ□□せり、□□□□九□□岩屋あ／り、父母のために極樂を現し給へる跡あり、三／十三所の靈嶺あり、斗藪の行者靈験をい／のる砌なり、(中略)仙人／利生のために遺骨をと、め給、一字の精舎／をたて、万人の良縁をむすはしむ、其所に／又一の堂舎あり、高野大師御作の不動尊／を安置したてまつる、

すなはち大師練行の古跡／瑜伽薫修の爐壇、ならびに御作の影像すか／たをかへすして、この地になをのこれり（割注）「上人発心之地故勝絶之趣記／伝記雖紛失古老相伝之」／聖、此地に参籠して遁世の素意をいのり給、霊／夢しきりに示して、感応これあらたなり

【史料1】から、この絵巻が作成された13世紀後半には「菅生寺」及び「菅生の岩屋」が、①「観音影現の霊地、仙人練行の古跡」である、②安芸国の狩人がこの山で観音を発見し、菅生寺を建てた、③隋からの朝使が鎮守となり、白山大明神として堂の南に祀られた、④土佐国の女人が法華三昧の修行をして仙人となった、⑤弘法大師練行の古跡でもある、と考えられていたことがわかる。また絵の部分では、不動堂や仙人堂などの堂舎や、そびえ立つ峰とそれにかけられた梯子や参詣者が描かれている。

『一遍聖絵』の詞書の内容や絵の描写は、史料的に見てどの程度妥当性を有するのであろうか。詞書では、「菅生寺」の建立は一遍らが訪れた文永10年(1273)より前となっているが、「菅生寺」の名は建長7年(1255)の「伊豫国神社佛閣等免田注進状寫」(國分寺文書)<sup>10</sup>に「寺田 五十三丁二反六十歩／(中略)／菅生寺五反／光林寺 一丁／(中略)／已上廿ヶ所寺分」とあり、文永10年(1273)以前に存在していたことが確認できる。加えて、寺田(寺の免田)5反を国衙によって認められているところから、寺院としての体裁をある程度整えていたと考えられる。

また、菅生山中では平安後期のものと推定された懸仏と経石<sup>11</sup>が出土している。さらに、岩屋寺の岩窟から愛媛大学法文学部日本史研究室によって発見・調査された柿経等には、法華経や六字名号が書かれており、信仰の実態を鮮やかに伝える<sup>12</sup>。これらの出土品は、「菅生寺」において『一遍聖絵』で描かれた法華仙人のような法華持経者が実際に存在し、平安後期より中世を通じて活動していた可能性を示している。したがって、『一遍聖絵』は13世紀後半の「菅生寺」をおおむね正確に描いており、文永10年(1273)にはその境内に白山大明神が祀られていたと考えられる。

江戸時代の遍路記も、大宝寺や岩屋寺に白山権現が祀られていたことを記している。例えば元禄2年(1689)に高野山の学侶寂本が著した『四國徧禮靈場記』<sup>13</sup>の岩屋寺の項の本文には、「此より奥に至りてせりわりといふ岩途あり、白山権現作り玉ふといふ、高さ二十間ばかり、それより上に又奇挺せる嶮岩あり、高さ三十尺ばかりなり、二十一のはしごをかけてのぼる、其上に白山権現の社鉄にて作れり」とあり、境内図では、梯子がかかる峰の頂上の社に「白山」と表記されている。また松浦武四郎が弘化元年(1844)に著した「四國遍路道中雑誌」<sup>14</sup>は、大宝寺の境内の様子を「四十四番菅生山大覚院大宝寺 (中略) 並て神明宮、赤山権現、並て大師堂、(中略) 並て白山社」と伝えている。

それでは、大宝寺や岩屋寺、すなわち中世の「菅生寺」に白山信仰はいかにしてもたらされたのであろうか。ここで注目したいのは、智積院の僧澄禅が承応2年(1653)に記した「四國邊路日記」<sup>15</sup>に、かつて大宝寺が天台宗、奥院の岩屋寺が真言宗の二宗兼学<sup>16</sup>の寺であったと記されていることである。

## 【史料2】「四國邊路日記」(抄)(承応2年(1653))

菅生山 (前略) 昔時大宝年ニ此菅生ノ山ニ大成光物在リ、其比久間ノ郷ヲ知行シタル獵師此光物ヲ尋テ見バ熾降ノ満月輪也。其月ノ中ニ十一面觀音ノ尊鉢現ジ玉フ。彼獵師此尊容ヲ拝奉テ、則一字ノ草堂ヲ营造シテ尊鉢ヲ奉安置。此獵師ハ只人ニ在ザルカ、其後現身登天シテ蹤跡ナシ。則此獵師ヲ当山ノ鎮守ノ神ト崇テ赤山権現ト号ス。其後禁裏ニ聞召及玉ヒ、勅願寺ト成テ菅生大宝寺ト称玉フ。其時ヨリ天台宗住持ス。開山分明不成。嵯峨天王ノ御宇ニ大師四国ヲ巡行シ玉イテ、当寺ニ到玉テ寺ヨリ卯辰ノ方ノ深山分入り、岩屋寺ヲ開キ当寺ノ奥院ト玉フ。依之当寺ノ衆徒ハ真言・天台二宗兼学也。(中略) 天正年中ニ太閤御所御治世ノ砌、諸国ノ寺社領没収セラルル(中略) 天台山エ登事無クシテ、今ハ灌頂ヲバ高野受、学文ヲバ関東エ下、新義ノ教学ヲスルト鏡円法師語ラル、也。

また大宝寺は鎌倉時代の三十番神像30体を有している。三十番神とは、30日(1ヶ月)毎日交代で『法華経』を守護するとされる神々であり、天台宗では平安時代から、日蓮宗では室町時代から信仰されている。このことから、「菅生寺」は鎌倉時代には天台宗の寺院であった可能性が高いと考えられる。

ところで三十番神には、比叡山の守護神である日吉山王権現の上七社の一部、すなわち大比叡、小比叡、



聖真子、客人、八王子の5社それぞれの祭神が含まれている。このうち客人は、天台の作法や口伝を集録した鎌倉時代の仏教書「溪嵐拾葉集」<sup>17</sup>に「客人ハ白山権現也」とある。

また三十番神には赤山も含まれているが、これは比叡山延暦寺の鎮護神である赤山権現<sup>18</sup>である。澄禅の「四國邊路日記」は、大宝寺には赤山権現が祀られているとあり、その存在は、大宝寺の縁起や他の遍路記にも示されている。大宝寺の住職快智による「菅生山因縁」（寛文10年（1670））<sup>19</sup>には「本堂之東 赤山大権現（中略）同堂之西 白山大権現」と記され、当時の大宝寺は本堂を挟んで東西に白山権現と赤山権現を祀っていたことがわかる。それより19年後に寂本が著した『四國徧禮靈場記』の大宝寺の境内図には、本堂に向かって右の社に「赤山」、左の社に「三島」の表記がある。松浦武四郎の「四國遍路道中雑誌」も上記のように大宝寺の項で赤山権現について述べているが、岩屋寺の項でも「是より七、八尋の鎖をのぼり、其上に二十一の階子上りて、上に白山権現社、此処を逼わり岩と云、（中略）また其東なる突出たる岩上赤山権現」と、白山権現とともに赤山権現の存在を記している。

大宝寺と岩屋寺では江戸時代に鎮守神として赤山権現が祀られているのが確認できることから、江戸時代以前においても、天台宗の中でも山門派（比叡山延暦寺）の影響が強い寺院であった可能性がある。したがって、『一遍聖絵』巻二「菅生の岩屋」で描かれる白山信仰は、天台宗山門派によってもたらされた可能性があると言えるだろう。

## 2. 白山を祀る伊予国の寺社

この章では、伊予国における「白山」を祀る寺社<sup>20</sup>を取り上げ、それらに「菅生寺」と同じく中世において白山信仰が存在していたかどうかを論じる。

まずは第51番札所でもある石手寺の「河野通宣左京太夫安養寺石手寺由緒書并同寺寺領寺寶等目録」<sup>21</sup>、いわゆる「刻板文書」を検討する。文書には永禄9年（1566）に薬師堂や庫蔵が炎上し霊宝や由来が焼失したため、翌永禄10年（1567）に作成されたとあり<sup>22</sup>、石手寺の由来や伽藍棟数等が板の両面に刻まれている。表面の由来の冒頭には「豫州安養寺 人皇四十三代／一、元明天皇 和銅五壬子載二月甲辰日白山権現社勧請／伊豫大領散位玉興」とあり、石手寺の由来は和銅5年（712）の白山権現の勧請に始まるとしている点が注目される。裏面の伽藍棟数も「一、西山白山権現宮」より始まっており、少なくとも「刻板文書」が作成された頃には石手寺に白山権現に対する信仰が存在していたと考えられる。

また、石手寺境内の裏山からは経塚が発見され（石手寺経塚）、そこから11世紀後半～12世紀のものと考えられる白磁壺や合子が出土している。白磁壺は内部に法華経一巻を蔵し、経塚には保元元年（1156）銘の経筒が相伴していたとされる<sup>23</sup>。現在石手寺のある地域においても、「菅生寺」と同様、平安後期に法華経信仰が存在していた可能性を示していると言えよう。

次に、石手寺以外の「白山」を祀る愛媛県の寺社について、『愛媛県神社誌』<sup>24</sup>や『温泉郡神社誌』<sup>25</sup>、および「愛媛県神社庁」の公式HP<sup>26</sup>で「白山」を検索した結果、【表1】の18社が抽出された。記載されている「白山社」の創建年代は、11社が不記載、西暦700年前後が3社、弘仁年間（810～824）が2社、12世紀末もしくはそれ以前が1社、江戸時代以降が1社である。それぞれの社の縁起や他の文献・考古資料にも着目すると、18社のうち〈No.8〉の龍池神社の縁起は、『愛媛県神社誌』には「弘仁6年（825）弘法大師岩屋寺開基の際、峰々谷々に大那智権現、白山権現、高祖権現、別山権現、古山権現、龍池権現を守護神として斎くという」とあり、岩屋寺すなわち「菅生寺」の白山権現を弘法大師の由来とする内容である。弘仁年間に遡れるかどうかは不明であるが、前章で論じたように、文永10年（1273）の時点で「菅生寺」の境内には白山大明神が祀られていたと考えられる。また〈No.12〉の白山神社は現在光林寺に隣接し、明治以前は一体であった。光林寺は天正元年（1573）に記された縁起を有する。

【史料3】「摩尼山自性院光林寺並奈良原山清浄光院蓮華寺略縁起」（抄）（光林寺文書、天正元年（1573））<sup>27</sup>

予州越智郡鴨部郷高野村摩尼山自性院光林寺並奈良原山清浄光院蓮華寺略縁起

一、抑当山者、釈迦牟尼応現之勝地、白山権現影向之靈地也、以奈良原山為奥院這山也、高峯秀万仞白雲翳半天、（中略）于茲有沙門号徳藏上人、于嵯大宝元辛丑年銜

【表1】「白山」を祀る愛媛県の神社（「愛媛県神社庁」HP、『愛媛県神社誌』、『温泉郡神社誌』より作成）

No.	名 称	鎮 座 地	白山社の 創建年代	No.	名 称	鎮 座 地	白山社の 創建年代
1	浦山神社	西条市黒瀬字坂中	(記載なし)	10	大山神社	西予市明浜町俵津	承応3年(1654)
2	鈴前神社	新居浜市郷字上郷	(記載なし)	11	恵美須神社	鬼北町大字吉波	(記載なし)
3	宮内神社	西条市宮之内	(記載なし)	12	白山神社	今治市玉川町畑寺字清水甲	大宝元年(701)
4	恵良神社	松山市上難波乙	(記載なし)	13	白玉神社	今治市波方町小部カンド乙	弘仁元年(810)
5	白山大神社	今治市朝倉下乙	建久年間(1190 ～1199)以前	14	斎宮神社	愛南町御荘長月	(記載なし)
6	徳川神社	松山市津吉町乙	(記載なし)	15	三島神社	松山市井門町	(記載なし)
7	白山神社	東温市滑川甲	舒明天皇の時代 (629～642)創立 文武天皇元年 (697)造宮	16	白山神社	新居浜市中村	文武天皇元年 (697)
8	龍池神社	久万高原町七鳥	弘仁6年(815)	17	白山神社	温泉郡浮穴村大字井門字宮邊 (現：松山市井門町)	(記載なし)
9	三嶋大明神社	松山市西垣生町	(記載なし)	18	白山神社	温泉郡石井村大字井門 (現：松山市北井門町)	(記載なし)

この縁起は冒頭で、この山（摩尼山）は釈迦牟尼と白山権現が応現影響する霊地であり、奈良原山を奥院とすること、徳蔵上人が大寶元年（701）に開山したことなどを述べている。奈良原山（檜原山）頂の奈良原神社は、12世紀の銅製宝塔経筒と円筒形銅経筒が出土した経塚があることで知られており、平安後期の法華経信仰の存在を示唆する。また光林寺は「伊豫國神社佛閣等免田注進状寫」の寺田の項に、菅生寺に続いてその名が記されており<sup>28</sup>、建長7年（1255）には建立されていたことが確認できる。

以上、中世にはすでに存在し、白山信仰と関わりを持つ寺社として石手寺、〈No.8〉の龍池神社、〈No.12〉の白山神社を取り上げた。このうち〈No.8〉の龍池神社は神仏分離以前の岩屋寺をルーツとしている。石手寺と〈No.12〉の白山神社は、ともに縁起の冒頭に白山権現の勧請もしくは影響が語られ、「菅生寺」と同じく平安後期には法華経信仰が存在している。また石手寺は本堂や仁王門などが鎌倉時代に建てられたものであり、〈No.12〉の白山神社と一体であった光林寺も鎌倉時代には建立が確認できる。これらのことより、石手寺と〈No.12〉の白山神社は鎌倉時代に白山権現を祀っていた可能性をもつと考えられる。

### 3. 四国遍路の札所と白山信仰

この章では「白山」を祀る四国遍路の札所を取り上げ、それらに「菅生寺」と同じく中世において白山信仰が存在していたかどうかを論じる。

江戸期の遍路記を見ると、第23番薬王寺、第36番青龍寺、第38番金剛福寺、第44番大宝寺、第45番岩屋寺、第51番石手寺の6ヶ寺で白山権現が祀られている。このうち大宝寺と岩屋寺、すなわち「菅生寺」と、石手寺についてはすでに論じた。薬王寺は『四國徧禮靈場記』に「本堂の右に鎮守白山権現社拝殿あり」、「四國遍路道中雜誌」に「鎮守金毘羅社 并て儉伽山、白山等有」とある。また青龍寺については「四國邊路日記」、『四國徧禮靈場記』がともに「鎮守は白山権現也」と記し、「四國遍路道中雜誌」では境内図の鳥居と社に「白山」の表記が見られる。しかし江戸期の遍路記はいずれも、薬王寺や青龍寺の白山権現の由来について記していない。また縁起や他の資料より、これらの札所の白山権現の由来に関する記述を見つけることは現在のところできてない。

金剛福寺については、『四國徧禮靈場記』の境内図の鳥居に「白山権現」と記されている。これ以外の江戸期の遍路記で、金剛福寺の白山権現について記述したものはないが、この寺は享祿5年（1532）に記された「蹉跎山縁起」<sup>29</sup>を有しており、そこには「白山」についての言及が見られる。

**【史料4】「蹉跎山縁起」(抄)(享禄5年(1532))**

夫蹉跎山金剛福寺は、過去遠々佛跡、菩薩説法の浄場なり、仰て地形の勝絶を見るに、後は大悲の山峨々とそびへ、(中略)前は弘誓の海満々として(中略)凡南方生身大士不退に影向あり、(中略)惣て六十二億恒河沙の菩薩の中に観音の功德ことにすぐれ、(中略)金剛福寺は去斯不遠の補陀落界也、(中略)嵯峨天皇弘仁暦、忠仁公(中略)事の由を奏聞有て、弘法大師に勅詔を下し、則勅願所として伽藍を起立し、大悲観世音菩薩を本尊とす、(中略)鎮護には熊野三所権現、愛満、寶満、白皇、白山等を勧請し奉る

この縁起より、金剛福寺において享禄5年(1532)に、本尊観音菩薩の鎮護神として白山が祀られていたことがわかる。また、熊野三所権現や白皇、愛満、宝満も鎮護神として祀られていたこと、南方生身大士すなわちこの世に化身した観音菩薩が影向する補陀落浄土であり、嵯峨天皇の勅が下り弘法大師が伽藍を建立した、とみなされていたことなども明らかである。

さらに金剛福寺は中世よりのいわゆる『金剛福寺文書』を所蔵しており、そのうち正嘉元年(1257)の「前摂政家政所下文案」<sup>30</sup>は、その冒頭で寺の由来にふれている。

**【史料5】「前摂政家政所下文案」(抄)(正嘉元年(1257))**

蹉跎御崎回禄時造宮御下文案 正嘉元年四月／前摂政家政所下 土佐国幡多庄官百姓等／可早奉加阿闍梨慶全勸進造金剛福寺堂舎神殿等用途事／副下／御奉加御教書／

右、彼慶全解状稱、謹案弘仁十四年正月十九日 天皇手印 勅書稱、当山者は弘法大師現身證果之靈地、大権現能為作依怙之伽藍、(中略)以千手観音而為其本尊、以三所権現而為大行事、忠仁公為上卿(中略)故老相伝曰、補陀落山化主三面千手観世音菩薩、毎日臨光於此寺云云、是以性空上人之拜生身也、於此證六根清浄之位、賀東行者之遂即往也

この文書より、正嘉元年(1257)において金剛福寺は弘法大師が修行した地であり、三所権現が大行事、補陀落山の主千手観音が毎日来臨する地であると認識されていたことがわかる。ここで注目されるのは、観音の来臨を拝しているのは性空上人であるとしていることである。性空上人は天台宗の書写山円教寺を開いた僧である。性空上人の没後すぐの寛弘7年(1010)に著された「一乗妙行悉地菩薩性空上人伝」<sup>31</sup>には、「三吉処」として講堂、如意輪堂、准胝峰の名が見える。それが正安2年(1300)に成立した「性空上人伝記遺続集」<sup>32</sup>では、「三吉処」は講堂、如意輪堂、白山准胝峰となり、鎌倉後期の書写山には観音信仰と習合する形で白山信仰が存在していたと考えられる。鎌倉後期の金剛福寺に、書写山と同様に白山信仰が存在していたかどうかは明らかではないが、天台宗寺院である書写山の影響を受けていた可能性はあると言えよう。

金剛福寺以外では、第21番太龍寺が「白山」の登場する中世の縁起を有しており、興味深い。この『太龍寺縁起』<sup>33</sup>は縁起や古文書など複数の作品から構成されたものである<sup>34</sup>。その中の13世紀中頃から長祿年間(1457～1460)の成立と推定される「舎心山太龍寺縁起」<sup>35</sup>には「坎殿三柱神在、白山辨財天三輪大己貴尊在」という一節がある。この「三輪大己貴尊」は、比叡山の守護神である日吉山王権現の上七社の一つ大宮で祀られている、大和国の三輪から勧請された大己貴神を指すと考えられる。したがって中世の太龍寺は山王信仰の影響を受け、白山権現や大己貴神を祀っていた可能性が高いであろう。

『太龍寺縁起』には、13世紀中頃の成立とみられる「阿波國太龍寺縁起」<sup>36</sup>という縁起も含まれている。この縁起は、弘法大師が和食明神と焼山の麓で出会った後、明神のすすめで太龍寺を建立したという内容であるが<sup>37</sup>、その中に太龍寺山は「補陀落之観音日々影向」の地であるという記述がある。

**【史料6】「阿波國太龍寺縁起」(抄)(承和3年(836)、13世紀中頃の成立と推定)**

右太龍寺者、一天歸依之靈場、三地應迹之聖跡、桓武天皇之開花構也、以満虚空蔵而為本尊、高祖大師之致草創也、崇和食明神為鎮守、(中略)遂阿波國到焼山麓、(中略)觀夫當山為體、(中略)中嵩紫微宮之妙見夜々降臨、南嵩補陀落之観音日々影向、(中略)獨經行太龍之嶺

「四國遍禮名所図会」<sup>38</sup>(寛政12年(1800))の太龍寺の項には、「補陀落山(割注)「観音堂／神武社」」の記載



がある。また太龍寺山の山頂部（617m）には、「ふだらく寺」の建物基礎が残っているとの指摘もある<sup>39</sup>。太龍寺は空海が実際に求聞持法を修行した場所に建立され、弘法大師信仰と深く結びつく寺院であるが、中世においては補陀落山の観音菩薩が毎日影響する場所とも見なされていたことは留意すべきであろう。

以上、白山を祀る、もしくはかつて祀っていた札所として太龍寺、薬王寺、青龍寺、金剛福寺、大宝寺、岩屋寺、石手寺の7ヶ寺が確認できた。このうち中世に成立した縁起に白山権現の名が見える寺は太龍寺、金剛福寺、「菅生寺」（大宝寺+岩屋寺）、石手寺であり、石手寺を除いていずれも13世紀後半の史料（縁起・古文書・絵巻）に「観音影響の地」とであると述べられていることが明らかになった。加えて、太龍寺、金剛福寺、「菅生寺」とも中世において天台寺院や山王信仰の影響を受けた可能性がある。また札所ではないが、光林寺も「白山権現影響之霊地」であることが縁起の冒頭で語られており、観音菩薩や白山権現が影響する地とみなされていることが、白山権現が祀られる上で重要視されていたのではないかと考えられる。

#### 4. 白山信仰と補陀落信仰

平安時代末期に成立した『梁塵秘抄』<sup>40</sup>には、次の歌がある。

##### 【史料7】『梁塵秘抄』巻第二 霊験所歌

淡路はあな尊 北には播磨の書写をまもらへて 西には文殊師利 南は南海補陀落の山に対ひたり 東は難波の天王寺に 舍利まだおはします

この「南は南海補陀落の山」について、『日本古典文学全集 42』の注は「観音菩薩の垂迹地としての熊野三山をさすか」としている。神野富一は「補陀落の自然相」<sup>41</sup>において、「空也誄」<sup>42</sup>で空也が観音菩薩像を有する湯島を訪ねたとあり、江戸時代の「阿波志」<sup>43</sup>が湯島を伊島としていることから、「南海補陀落の山」を伊島に比定している。ここで「南海」という語句に注目すると、「南海道」という意味もあることから、「補陀落之観音日々影響」の地とされた太龍寺山<sup>44</sup>も「南海補陀落の山」に比定できるのではないだろうか<sup>45</sup>。

北陸にそびえる白山は、有徳の大明神である白山妙理大菩薩が住まう山であり、その本地は十一面観音菩薩とされていた。

##### 【史料8】「白山之記」（抄）（長寛元年（1163）成立）<sup>46</sup>

白山之記に云ふ、／加賀の国石川郡味智の郷に一つの名山あり、白山と号す、その山頂を禅定と名づく、有徳の大明神住す、即ち正一位白山妙理大菩薩と号す、その本地は十一面観自在菩薩なり

堀大介は『泰澄和尚と古代越知山・白山信仰』において、本地垂迹説の広まった平安時代においては、浄土に憧れる衆生にとって最も効果的な実践は、垂迹のいる霊地におもむき結縁することであり、こうした思想状況の中で白山が観音菩薩の住む補陀落浄土とみなされるに至った、とする<sup>47</sup>。衆生からみれば、観音菩薩もしくはその垂迹神である白山権現との結縁が叶う霊地が補陀落浄土なのだと言えよう。

四国遍路の成立に、海のかなたの常世（＝補陀落浄土）を思慕しながら辺路をめぐる、補陀落信仰と結びついた形の辺地信仰、そして補陀落渡海の発祥の地である熊野の信仰が大きな役割を果たしたことは論を待たない<sup>48</sup>。しかし四国における補陀落信仰には、観音菩薩や白山権現の影響する霊地（＝補陀落浄土）に衆生がおもむき、結縁を図るという白山信仰の要素も含まれているのではないだろうか。「蹉跎山縁起」で補陀落渡海<sup>49</sup>が語られる金剛福寺の西にそそり立つ海食洞門に、「白山」の名がつけられていることは示唆的である。海のかなたの島でも、雲海を突き抜けてそびえ立つ山<sup>50</sup>でも、結縁が叶う霊地こそが補陀落なのである。

#### 結びにかえて

以上、「菅生寺」をはじめとする、四国遍路の札所や伊予国において祀られてきた白山権現に注目し、天台宗によってもたらされた可能性があり、四国における補陀落信仰は白山信仰の要素も含むと考えられることを指摘した。ここでいう白山信仰の要素とは、観音もしくは白山権現の影響する霊地を補陀落浄土とみなし、衆生がおもむいて神仏との結縁を図るという実践の側面である。

最後に再度【史料1】の『一遍聖絵』巻二「菅生の岩屋」の場面にふれ、本稿の結びにかえたい。絵画部分では、そびえ立つ三峰の頂上に社があり、向かって右端の峰には梯子がかけられ、二人の僧がそれを登っている姿が描かれている。一遍と、その弟子でのちに『一遍聖絵』を編纂した聖戒の姿であろうか。梯子の下では、白装束の男女数人がその姿を見守り、中には手を合わせている者もいる。梯子をかけられた峰は、のち江戸期の遍路記で「白山」として描かれた峰であり、現在も「白山妙理大菩薩」が祀られている。中央の峰の頂上へは梯子はかけられていないが、白装束の男が一人社の前で祈っている。ここで描かれている白装束の人々は、白山権現と結縁するために「菅生の岩屋」におもむいた衆生と言えよう。さらに詞書には「聖、此地に参籠して遁世の素意をいのり給、霊夢しきりに示して、感應これあらたなり」とあることから、一遍上人自身も「観音影現の霊地」である「菅生の岩屋」に参籠し、霊夢という形で結縁したと言えるのではないだろうか。

四国遍路の成立過程を考えるにおいては、神仏との「結縁」といった宗教的実践の側面にも目を向けていく必要があると思われる。

## 註

- 1 伊予史談会〔編・発行〕『四国遍路記集』（1981年）。
- 2 白山とは御前峰・大汝峰・別山の三峰の総称である。「泰澄和尚伝記」（天徳2年（958）頃成立）は、御前峰は伊邪那美神で白山妙理大菩薩と号し、本地が十一面観音であると記す。白山信仰の拠点であった加賀馬場白山寺・越前馬場平泉寺・美濃馬場長滝寺は、いずれも平安時代末期には天台宗延暦寺の末寺となった。
- 3 武田和昭『四国辺路の形成過程』（岩田書店、2012年）、胡光「山岳信仰と四国遍路」（四国地域史研究連絡協議会〔編〕『四国遍路と山岳信仰』岩田書院、2014年）、長谷川賢二「四国遍路の形成と修験道・山伏」（愛媛大学四国遍路・世界の巡礼研究センター〔編・発行〕『四国遍路と世界の巡礼』第3号、2018年）、川岡勉「四国八十八ヶ所の成立」（愛媛大学四国遍路・世界の巡礼研究センター〔編〕『四国遍路の世界』筑摩書房、2020年）など。
- 4 小松茂美〔編〕『日本の絵巻20 一遍上人絵伝』（中央公論社、1988年）。
- 5 海岸山岩屋寺は、鎌倉時代には菅生山大宝寺の奥の院であり、二寺は一体で「菅生寺」であった。本稿では、大宝寺と岩屋寺の江戸時代以前の歴史を論じる場合、二寺は一体とみなす必要があると考え、「菅生寺」と表記する。
- 6 『愛媛県史 資料編 古代・中世』（愛媛県、1983年）。
- 7 川岡勉「中世の石手寺と四国遍路」（四国遍路と世界の巡礼研究会〔編〕『四国遍路と世界の巡礼』法蔵館、2007年）。
- 8 平泉隆房「中世前期における白山信仰日吉信仰全国伝播についての一考察（四）一山陰道・南海道を中心として」（金沢工業大学日本学研究所〔編・発行〕『日本学研究』19号、2016年）。
- 9 大本敬久「愛媛県南予地方の白王信仰」（愛媛県歴史文化博物館〔編〕『明石寺と四国遍路』伊予鉄総合企画株式会社、2021年）。
- 10 前掲注6。
- 11 昭和9年（1934）、菅生山中から座高7～10cmの平安後期の懸仏像8体が出土。1体の他は座像の十一面観音像。観音像は、法華経を書付けた約20cmの平石（経石）約100個に覆われた状態で出土した。『久万町誌 増補改訂版』（上浮穴郡久万町、1989年）、大西利康「観音出現霊験記」（ふるさと久万編集委員会〔編〕『ふるさと久万 創刊号』久万郷土会、1969年）、久万高原町公式HP([kumakogen.jp](http://kumakogen.jp)) 2022年1月9日閲覧。
- 12 寺内浩「愛媛県久万高原町岩屋寺こけら経・笹塔婆について」（『愛媛大学法文学部論集 人文科学編』第40号、愛媛大学法文学部、2016年）。
- 13 前掲注1。
- 14 松浦武二郎〔著〕、吉田武三〔編〕『松浦武二郎紀行集 中』（富山房、1975年）。
- 15 前掲注1。
- 16 大宝寺も岩屋寺も現在の宗派は真言宗豊山派である。
- 17 SAT大正新脩大藏經テキストデータベース2018年版 ([21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/](http://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/)) 2022年1月5日閲覧。
- 18 円仁が入唐して登州の赤山法花院に滞在中、そこで新羅人が礼拝していた当地の山神（赤山神）に深く帰依し、日本に伴い帰った。遺言により仁和4年（888）、弟子の安恵が比叡山西麓に赤山禅院を建て、以来東麓の日吉社とともに天台の鎮護神となった。園城寺（天台宗門派）では、円珍によって唐から伴われた同じ神祇を新羅（しんら）明神と呼んで、伽藍鎮護神としている。
- 19 『久万町誌 資料集』（久万町、1969年）。
- 20 愛媛県の「白山神社」の祭神は、菊理姫命である場合が多い。前掲注9の大本論文を参照。石手寺の例となるが、明治以前は白山権現が祀られていたが、現在は隣接する大山積神社（明治初年に石手寺から分離）に、配神



- として菊理姫神が祀られている。これは、白山神社や客神社で祀られていた白山権現が、明治初年の神仏分離や明治四十年代の神社合祀の際、記紀神話に記載された「菊理媛」に置換された可能性を示していると言えよう。
- 21 前掲注6。
  - 22 石手寺の「刻板文書」を永禄10年(1567)作成の史料とみなすのは難しいのではないかという論が近年出ている。石岡ひとみ・山内治朋・井上淳「石手寺刻板(河野通宣安養寺由緒書刻板)について 一附 永禄5年河野氏制札の発給者再考」(愛媛県歴史文化博物館[編]『研究最前線 四国遍路と愛媛の霊場』伊予鉄総合企画株式会社、2018年)。
  - 23 石岡ひとみ・小玉亜紀子「資料紹介 奈良国立博物館所蔵 石手寺経塚出土資料」(『鹿園雑集:奈良国立博物館研究紀要』第15・16合併号、奈良国立博物館、2015年)。
  - 24 愛媛県神社庁[編・発行]『愛媛県神社誌』(1974年)。
  - 25 愛媛県神社庁温泉郡支會[編・発行]『温泉郡神社誌』(1916年)。
  - 26 「愛媛県神社庁」の公式HP([ehime-jinjacho.jp](http://ehime-jinjacho.jp)) 2021年12月31日閲覧。
  - 27 今治郷土史編さん委員会[編]『今治拾遺 資料編 近世I』(今治市役所、1987年)。
  - 28 前掲注6。
  - 29 『続群書類従 第二十八輯上 釈家部』(続群書類従完成会、1931年[初版1924年])。
  - 30 『南路志 第三卷』(高知県立図書館、1991年)。
  - 31 『兵庫県史 史料編 中世4』(兵庫県、1989年)。
  - 32 前掲注31。
  - 33 前掲注29。
  - 34 大石雅章『「太龍寺縁起」について』(徳島県・徳島県教育委員会[編・発行]『「四国八十八箇所霊場と遍路道」調査報告書3 舎心山常住院太龍寺』、2013年)。
  - 35 前掲注29。
  - 36 前掲注29および34を参照。
  - 37 『阿南市史 第1巻 原始・古代・中世編』(阿南市、1987年)。
  - 38 前掲注1。
  - 39 石田啓祐「太龍寺建造物の石材使用 一礎石の大理石と珪石」(徳島県・徳島県教育委員会[編・発行]『「四国八十八箇所霊場と遍路道」調査報告書3 舎心山常住院太龍寺』、2013年)。
  - 40 臼田甚五郎ほか[編]『神楽歌 催馬楽 梁塵秘抄 閑吟集』(新編日本古典文学全集42)(小学館、2000年)。
  - 41 神野富一「補陀落の自然相」(甲南女子大学[編]『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』第45号、2008年)。
  - 42 『続群書類従 第八輯下 伝部』(続群書類従完成会、1983年[初版1927年])。
  - 43 佐野之憲[編纂]、笠井藍水[譯]『阿波誌』(1932年)。この書は「阿波志」(文化12年(1815))の和訳である。
  - 44 太龍寺には「阿波国大瀧寺所領注進状」(康和5年(1103))が伝わる。太龍寺は京都の東寺の別院(末寺)であり、弘法大師空海の初行の霊山として当時の京の人々にもよく知られた寺院だったと考えられる。前掲注34。
  - 45 『志度寺縁起』中の「御衣木縁起」は、志度浦に漂着した霊木(御衣木)を園子尼が見つけ、観音の化身である童子が十一面観音を彫り上げたとする内容であるが、園子尼も「文殊師利菩薩化身」であるとしている。『志度寺縁起』は鎌倉時代末期の成立とされるが、本尊の十一面観音は平安初期の作、志度寺自体も『梁塵秘抄』に「四方の霊験所」の一つ「志度の道場」として挙げられ、平安時代末期には都にも聞こえた観音霊場であった。遠日出典「讃岐志度寺縁起と長谷寺縁起」(日本仏教史学会[編・発行]『日本仏教史学』第25号、1991年)。「西には文殊師利」の「師利」は「しと」とも読め、「志度」と掛け合わせていると解釈することも可能であろう。
  - 46 桜井徳太郎・萩原龍夫・宮田登[校注]『寺社縁起』(日本思想体系20)(岩波書店、1975年)。
  - 47 堀大介『泰澄和尚と古代越知山・白山信仰』(雄山閣、2018年)。
  - 48 近藤喜博『四国遍路』(桜楓社、1971年)、同『四国遍路研究』(三弥井書店、1982年)、五来重『遊行と巡礼』(角川書店、1989年)、頼富本宏『四国遍路とはなにか』(角川書店、2009年)など。
  - 49 海のかなたの常世=補陀落浄土を目指す「補陀落渡海」は往路のみの旅路で、戻ってくることは想定されていない点が、通常の参詣(霊場へ行ってまた帰って来る)とは異なる。そびえ立つ山の補陀落であれば、崖から飛び降りる「捨身」が「補陀落渡海」と同じ意味を持つ行為だと考えられる。太龍寺の山号は現在「舎心山」であるが、「四國邊路日記」には「捨身山」とあり、「大師御影童形ノ時、身を捨玉フ身捨山ト云所在」とある。前掲注1。
  - 50 『四國徧禮靈場記』は岩屋寺の項で大師作の御歌として、「山高き谷の朝霧海に似て松ふく風を浪にたとへん」を載せる。前掲注1。岩屋寺の山号は海岸山であるが、『例文 仏教語大辞典』(小学館、1997年)によれば、海岸山とは補陀落山のことである。